

浄土宗西山禅林寺派

# 潮音寺だより

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/> ナモの寺 検索  
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁 10-11

第348号  
平成24年10月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

[choonji@aichi.email.ne.jp](mailto:choonji@aichi.email.ne.jp)



【語意】撰取不捨せんしゅふしや（出典『観無量寿經』）  
阿弥陀仏が一切の衆生を救いとして、決して見捨てないことをいつ。

撮影：超空正道

月影つきかげの

いたらぬ里は  
なけれども

ながむる人の  
心にぞすむ

されど

空一面に  
雲が覆フクレい  
見えぬ月に

不安

いらだち  
希望が持てぬと  
嘆いてはならない

月在いづす

見えぬとも  
念ずるがよい

心にはすむ  
慈悲の月影

**撰取不捨** (せつしゅふしゃ)

私、若い頃より少々書道をたしなみ、俳句をひねります。それらに長けた人のことを、書家あるいは俳人といったりしますが、それは他人がそう呼ぶのであって、自分からは面映(おもは)ゆくて、なかなかいえないものです。

ところが、人間、年を取つてくるとだんだん厚かましくなつてきて、その気になつてくるから始末が悪い。この頃になつて、作品作りが楽しくなり、どう評価されようが、恥をさらすことも上達のことと心得て、ご迷惑をお掛けしている次第であります。

作品を創作するに当たつて、書の場合は、いくつもの古典の字体を集めた字典がありますので、それを参考にいたします。俳句の場合は、ほとんど直感によることが

多いです。気に入らなくて、何だかだ引つ張り出していじくらなくてはいけないようなのは、これまでの経験からすると、あまりよくありません。しかし、常日頃、『季寄せ』『歳時記』は読むように心掛けています。日々その積み重ねが肥(こ)やしとなつて、作品の幅が広がるものだと思つからずです。

平凡社の『俳句歳時記』全五巻を繰つていきますと、よくもまあこんなにも季題というものがあるものだと驚かされます。たとえば、**曼珠沙華**の項には**彼岸花**・**天蓋花**・**幽霊花**・**死人花**・**三味花**・**捨子花**とあり、それをどう使い分けるかが、俳句のおもしろさでもあり、難しさでもあります。

では、どの季題がその種類が多いかというと、詳しく調べたわけではありませんが、おそらく「月」

ではないかと思ひます。ちなみに、俳句の世界では、単に**花**といえは春咲く桜、**月**といえは**秋の月**ということになつていきます。その月の項には、**姮娥**・**嫦娥**・**玉兔**に始まり、実に百十七種、**名月の項**には十九種、**無月の項**には七種、他に月に関わる**三日月**・**待宵**・**十六夜**といった項目が十五種、その下にも何種かあるということで、つごう二百種近い季題が記載されています。

なぜこうまで、月は俳句に詠まれてきたかといえは——、「美しい」から、それに尽きるかと思ひますが、日本は農耕民族で、月の満ち欠けによつて、作物の作付けや収穫を行つてきたということも、ひとつの理由と考えられます。つまり、**中秋の名月**、陰暦八月十五夜は、収穫したばかりの里芋を供へ感謝して祝うということで**芋名月**、

また、**後の月**、旧暦九月十三夜は、栗や大豆を供えるということで**栗名月**、**豆名月**といふ具合です。

さらに、澄んだ空に清く照り輝く月は、神々しく、そこに宗教的感情が生まれても不思議なことではありません。**月白**という季節は、満月が出る間際、東の空のほのかな明るみをいい、阿弥陀仏、観音菩薩、勢至菩薩という三尊の来迎をそこに感じ取るうとしたものだとの説もあります。芭蕉の句に、

**月しろや膝に手を置宵の宿**

がありますが、味わい深いですね。ときに、俳句ではありませんが、法然上人の歌に、澄み輝く月の光を、阿弥陀仏が衆生に降り注ぐ慈悲と受けとめた、

**月影のいたらぬ里はなけれども**

**ながむる人の心にぞすむ**

があります。「すむ」は、澄むと住むの掛詞

この歌は、『**観無量寿経**』の「**光明遍照 十方世界 念仏衆生 撰取不捨**」という一節、阿弥陀仏の光明は、全世界を遍く照らし、念仏を唱える衆生を残らず救い取るという浄土の教えを、わかりやすく美しく表現されたものです。

現代人は、昔に比べて、月を見る機会が少なくなっているように思います。特に都会に住んでおりますと、電飾や車のヘッドライト、溢れる光源のなか、ビルの谷間の四角い空から見る月、そんな環境からでは、やはり、感動は生まれないでしょう。そんな、月が見えない、だから、あえて月を見ようとしないうと、心に必要なビタミンというか、何らかの栄養素が不足をきたすのではないか、そんな気がするのです。

まだ記憶に新しい、中学生がい

じめを苦に自殺するという事件がありました。問題点が色々取りざたされておりませんが、被害者の少年には、どんな状況にあっても、月影は、自分に届いているんだということに気づいて欲しかったと、とても残念に思います。

**無月**という季節があります。見えないものを俳句にしてしまつ、この日本人の感性は、すばらしいと思います。そこで以前、

**水銀灯ベンチを照らす無月かな**

という句を作ったことがあります。そして今回、

**見えずとも心にはすむ無月かな**  
という句を作りました。

名月は見ることがよろしい。しかし、それが叶わないのであれば、月を念じ、見えない光を見ようとすることで、撰取不捨の慈悲にあずかれるのだと、私は信じます。

◎勘定（かんじょう）

現在でこそ、金銭の場にしか用いられないこの語だが、元来は、考え定めるという意味をもっていた。すなわちこの場合の「勘」は、第六感、直感的ニユアンスをもっているのと受けとめていいだろう。

やがてこの語は、計算の場でも使われるようになる。僧空海が中国から持ち帰ってきた経典目録には、初めの部分に「勘定」という語が出てくる。つまりは、経典の数を計算すると、といった意味合いなのだ。

そして、  
現在のよう  
に金銭関係  
の場にだけ  
用いられる  
ようになると  
いうわけだが、  
現代人は  
お金の量は勘定  
できても、本当

今月の一言

自分に都会のい  
い人はいい人で、  
都会の悪い人  
は、悪い人？

価値については勘定（考え定める）  
できていないのでは？  
『仏教のことば』ひろさちや監修

雑記



▼永観堂特別拝観

京都の秋は永観堂。寺宝展が次  
ぎのとおり開催されます。

◎期間 平成24年11月11日（日）

～12月5日（水）

◎時間 午前9時～午後4時

◎ライトアップ

午後5時30分～午後8時30分

（午後9時に閉門）

◎拝観料 寺宝展 一般千円

ライトアップ 六百元

◎寺宝展展示物

- ・絹本着色山越阿弥陀図（国宝）
- ・絹本着色伝釈迦如来像（重文）
- ・絹本着色釈迦十六善神像（重文）

・絹本着色十大弟子像（重文）その他  
御本山は、もみじの永観堂とし

て有名で、近くには、南禅寺・安楽寺・  
法然院・銀閣寺と通じる、西田幾多  
郎ゆかりの哲学の道もあり、紅葉  
を見ながらの散策は、また格別であ  
ります。

▼安楽寺（永観堂から歩いて行ける）

住蓮山安楽寺といのが正式名。

法然上人の門弟の住蓮・安楽に由来  
します。美声で美形であったとか。  
後鳥羽上皇の女官、松虫・鈴虫を上  
皇留守中に剃髪出家させたことが逆  
鱗に触れ、住蓮・安楽は斬首死罪。  
法然上人始め門弟も、この事件を機  
に流罪に処されました。いわゆる、  
建永（承元）の法難の悲しい物語を  
伝えるお寺です。つじい・さつきまで  
有名ですが、もみじの頃もよいです。  
◆南無阿弥陀この手に掬う今日の月 沐魚